

第51回 緑の市民懇話会 会議要旨

- 1 日 時 令和4年11月2日(水) 15時00分～17時00分
- 2 場 所 生駒市役所 302会議室
- 3 出席者
(参加者) 久隆浩座長、下村泰彦、倉品夏江、長尾夏江、日高容子、山田勲、高比良紀、
真下藍
(事務局) みどり公園課 河島課長、巽課長補佐、南
- 4 傍聴者 なし

5 議題・要旨

1 開 会

2 案 件

(1) 生駒市緑の基本計画の進捗について

資料1に基づき事務局から説明し、意見交換を行った。

○取組の推進について

- ・平成29年度に創設された市民緑地制度について、国が制度を定める以前から生駒市は「市民の森」制度として実施してきた。また、市民による「公園にいこーえん」といった取組は、昨今世界中で重要視されている「プレイスメイキング」にあたる。緑の基本計画に記載されていないことを含めて、先進的な取組をされてきたと思う。
- ・緑の基本計画の前身に緑のマスタープランというものがあつた。緑の基本計画になって変わった点の中で、大きいのは、「民間緑化推進」について具体的に数値目標を立てて推進することになった点や、公園整備に関して予め市民への公表を義務付けた点、都道府県よりも住民に距離の近い基礎自治体が策定することとなった点、そして市民協働が掲げられるようになった点が挙げられる。この市民協働について、生駒市は早い段階から取り組んできたものと思う。
- ・計画を改めて振り返ると、生駒市はよく取り組んできたように思う。一方で、現在の環境を当たり前だと思っているような人が散見されるのが気がかりである。
- ・市民活動を推進していく行政の姿勢も必要
- ・計画期間20年間のうちに、中間見直しができると思う。市民参画に力を入れてきた一方で、昨今は公園に民間活力を導入した新たな賑わいづくり、プレイスメ

イキング、サードプレイスといった新しい潮流がある。今後は、市民参画はいかに継承するかを中心に考える一方で、事業者の活力を導入することについては、市民参画とは別途考えていく必要があると思う。

○公園・子どもの遊び場について

- ・「公園にいこーえん」は、地域に綺麗な使いたくなる公園があったからこそ始まった取組である。一方で、生駒駅の北側など、すぐに行ける場所に公園が少ない地域もあると聞く。暗くて鬱蒼とした公園なら近くにあっても行きにくい、ましてや子どもたちだけでは行かせられないということもある。公園のリニューアルについて、取組の中に生駒駅周辺の公園は含まれているのか、もし行われているなら知らない方もいるのでPRして欲しいと思う。生駒駅周辺は建設予定のマンションもあり、公園難民が生じるのではないかと思う。
- 公園のリニューアルを行っていた「コミュニティパーク事業」は、地元の方が公園をどう使っていきたいかをワークショップなどを通してアイデア出しをして数年かけて実施するもので、広報紙等にて募集をかけ実施していた。生駒駅北側周辺では自治会等から申し込みがなかった。
- ・そもそも、リニューアルの対象となるような公園は生駒駅周辺にあるのか。
- そもそも少ない。俵口など歴史の長いニュータウンにはあるが、駅からは少し遠い。駅前広場としてベルステージはある。
- ニュータウンと旧市街地、集落地では、まちの成り立ちが異なる。ニュータウンでは面的に広い範囲で計画的に整備を行ってきたので大規模な公園を整備できたが、旧市街地や集落地ではそうはいかない。一方で、旧市街地では路地、集落地では里山や田畑など、まち全体が子どもたちの遊び場としての機能を担っていた。公園だけが遊び場ではない。計画的につくられたまちと、先祖が徐々につくりあげてきたまちとでは、方向性を仕分けして考えたほうがよいのではないかと思う。公園や広場だけに遊びを閉じ込める社会そのものを変えていかないと、汲々としたところでしか子どもたちは育てない。大人たちの目線も含めて変えていかないといけない。
- ・立派な公園があっても遊んでいたら近所の人に怒られるということもある。そんな公園で誰が遊ぶのか。コミュニティが変わり、受け入れてもらえるようになると変わっていく。空間だけでなくコミュニティがないとうまくいかない。
- ・「公園にいこーえん」の良いところの1つは親も一緒に参加できて安全だと思えるところかもしれない。
- ・昔の遊び方を全部都市公園が引き受けたような経緯がある。昔はガキ大将が川あそびで危ないことを教えてくれたが、そのような存在がいなくなった。次に飲食やイベントを賑わいとする潮流が生まれて、現在は再度、子どもの遊び場や環境教育といった面を見直している時期になっている。

○担い手確保について

- ・まちを歩いていると荒れた公園が目につく。緑の基本計画に掲載される写真の公園も、当時は綺麗だったのかもしれないが、今では荒れているところもあるように思う。管理ができなくなって惨めに見える公園もたくさんある。公園アドバイザーといった形で管理している自治会に足を運んでもらって、どうしたら公園がきれいになっていくか助言するような仕組みはできないものか。
- 花づくりについては花のまちづくりセンター「ふろーらむ」でもガーデニング講座を実施して地域に帰っていただくような取組を行っている。
- ・現在、ほとんどの公園清掃を自治会に委託しているが、実際に草刈りをやっている方の年齢層は本当に高い。5年後何人残っているだろうと心配になる。
- ・草刈りはいちごっこなので、維持管理が楽になるようなアドバイスや、人が集まる方法を考えていければいいと思う。草が生えるのは公園を人があまり使っていないからでもある。人が踏みしめている場所にはあまり草は生えない。
- ・公園管理のガイドブックや事例集をつくってもよい。その上で、ノウハウをもっている人の話を聞きたければふろーらむや市役所が繋ぐという形が考えられる。

○財源確保について

- ・現行計画では公募債が掲げられているが、昨今はクラウドファンディングが普及しており、生駒市内でも「good neighbors」などの例がある。また、グッドデザイン賞の大賞をつい先日受賞した生駒市の「まほうの다가しやチロル堂」のように、大人がお金を使いながらその一部が子どもに回るような仕組みも注目すべき。横展開できるように、市が良い事例をどんどん市民に伝えていくことができればと思う。
- ・現行の緑の基本計画は平成16年に策定されたので、当時と今とで変わったことは大きく2つある。1点目は人口が予想通りには増えず、ほとんど下がっていること。結果的に1人あたりの公園面積は人口が減るほど増えていくようなことが起きる。2点目は、財政が厳しくなってきたことで、これは顕著な変化である。元来、都市公園は恒久的であり一度つくったら崩せないというものだったが、制度が変わりつつある。借地や立体公園などがやりやすくなり、行政は経費の削減と民間のノウハウ導入ができる。近年着目されているのがPark-PFIという手法で、公園内に商業施設や宿泊施設をといった収益施設を設置してお金を稼ぎながらそのお金で公園の管理や整備ができる。
- ・一方で、1杯500円を超えるコーヒーを毎日飲む人なんかほとんどいない。マスコミ受けはいいかもしれないが、都市公園の在り方として、そのような施設ばかり誘致するので本当にいいのかという疑問はある。
- ・市民活動を推進しながら商業活動もできるようなやり方を考えたほうがいいのではないかと思う。大阪は人口が多いからいいが、生駒では市民活動が盛んなのだから、そこ

でいかにお金を落としてもらうことを考えていくべきではないかと思う。それが生駒独自のやり方ではないか。

(2) 今後の生駒市の緑に関する市民活動について

各参加者から、生駒市における活動内容や将来の課題、課題解消のために取り組んでいること等について共有し、意見交換を行った。

○活動

- ・公園や駅前の花だん、自宅での植栽活動
- ・里山保全活動
- ・子どもが緑や自然に親しめるイベントや学習機会の企画・実施
- ・緑地や公園の手入れ
- ・公園におけるプレイスメイキング活動
- ・農業
- ・遊休農地の活用や手入れ

○10年後の展望

- ・様々な公園の花壇が綺麗に保たれ、住民の憩いの場となっており、若い人中心に子どもから老人まで気軽に参加できるようになっている
- ・地域で自分がやりたいと思う面白いことをやる人が沢山いる。現在活動に参加してくれている子どもたちがそうなってくれると嬉しい。
- ・生駒の自然・里山が県外にアピールできている
- ・行政との連携
- ・緑が保全され、自然環境と一体となった潤いのある生活スタイルが定着する
- ・現在の活動が維持できている

○課題

- ・後継者や参加者の不足
- ・高齢化
- ・行政との連携の難しさ
- ・経費確保（特に初動）

○課題解決に向けた工夫

- ・自身の健康維持
- ・水やりなどの手間を少なくする工夫

- ・ニュース発行、掲示、SNS による活動の周知
- ・新住民へのお花プレゼントによるお誘い
- ・行政との話し合い
- ・イベントや環境教育機会の創出
- ・自治会への補助のお願い、稼ぐシステム

(3) その他

○花とみどりの景観まちづくりコンテスト

- ・ポーチプレイスメイキング部門の応募数が少ないことが気にかかる。広報広聴課が実施するまちの交流会「つどい」など、関心のありそうな方が集まる場もある。そうした場で宣伝をしてもらうなど、庁内連携をしていけたらいいのではないか。

4 閉 会